紀要 Vol.46 No.1（通巻57号）170～183（2022）

岡山方言ウッタテの使用実態に関する予備的考察

星野　佳之※

A Preliminary Study on the Usage of UTTATE in Okayama Dialect

Yoshiyuki HOSHINO

１．はじめに

岡山方言にウッタテという語がある。次の例文のような言い回しで、「最初、手始め」の意味と説明される（佐藤亮一2009）。

（1）　物事はうったてが肝心じゃ。

また、「書道の始筆、起筆」を指す語としても用いられる（佐野榮輝2006）。

（2）「うったて（は筆を静かにおろしましょう）」（「書の書き方」として）[注1]

いま仮に(1)のような例をウッタテ１、(2) のような類いをウッタテ２と呼ぶことにする。両者は全くの同形の名詞で、共に何らかの開始局面を特に指す語という点で類似しながらも、既に意味の分化を経たもの同士のように見える。両ウッタテは、実際にどのように、或いはどこで、使用されているものなのか。その実態の調査を試みた。

２．本稿で分析対象とするデータと調査概要

調査は2021年８、９月に、ウェブアンケートによって行った。ノートルダム清心女子大学の教職員、在学生を中心に協力を呼びかけた結果、学内外の17歳～ 81歳（2021年９月１日現在）の281名から回答を得た。

フェイスシートによると回答者の内訳は次の通りである。

表１　回答者の年代別内訳

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代	合計
人数	39	71	35	64	49	17	5	1	281
割合	14%	25%	12%	23%	17%	6%	2%	0%	100%

年代別でみても、60代までは、大きく偏ることなく回答が得られた（**表１**）[注2]。

また「15歳までの間で一番長く住んだところはどこか」という問には、「岡山県」の回答が過半を占める（**表２**）。

以降、この言語形成期を過ごした場所を以て、「●●方言話者／●●県出身者」と呼ぶ。「岡山県外」の回答の内訳はそれぞれに少数で、10名を超えたのは広島、香川、愛媛の３県に留まった。

キーワード：始発，書道，ウチタテル
Keywords: Start, Japanese calligraphy, UCHITATERU（verb）
※　本学文学部日本語日本文学科

表２　「15歳まで（中学を卒業するまで）の最長居住地はどこか（都道府県）」

岡山	**広島**	**香川**	**愛媛**	大阪	兵庫	熊本	東京	長崎	千葉	山口	静岡
151	**20**	**18**	**18**	8	7	7	6	5	4	4	3
福岡	佐賀	宮崎	富山	島根	北海道	青森	茨城	埼玉	神奈川	新潟	長野
3	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1
岐阜	愛知	三重	奈良	和歌山	鳥取	徳島	高知	大分	鹿児島	**合計**	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	**281**	

３．調査結果

３．１．ウッタテ１について

３．１．１．ウッタテ１を用いる人々について

先掲のウッタテ１の用例(1) のような言い方について、「自分で言うことはありますか？」と問い、「言うことがある／言わないが聞いたことはある／言わないし聞いたこともない／わからない」のいずれかを答えてもらったところ、以下のような結果を得た。

表３　「物事はウッタテが肝心じゃ。」という言い方について

言うことがある	21	142	**51%**
言わないが意味は分かる	121		
言わないし聞いたこともない	135	139	**49%**
わからない	4		
合計	281		—

「言うことがある」「言わないが意味は分かる」と答えた人の合計と、「言わないし聞いたこともない」「わからない」と答えた人の合計が、それぞれ割合にして51％と49％という結果となった。この用法については、「認知度の高い層」と「認知度の低い層」が拮抗する形である[注3]。その両者の人数を出身県別にまとめ、高い層の人数順に並べると、以下のようである。

表４　ウッタテ１を認知するかしないか（都道府県別、高い層の順）

	岡山	香川	愛媛	宮崎	広島	大阪	兵庫	熊本	千葉
認知度・高	**112**	**8**	**4**	**3**	**2**	1	1	1	1
認知度・低	**39**	**10**	**14**	0	**18**	**7**	**6**	**6**	**3**
全回答者数	151	18	18	3	20	8	7	7	4
	北海道	青森	埼玉	新潟	長野	愛知	和歌山	鳥取	大分
認知度・高	1	1	1	1	1	1	1	1	1
認知度・低	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全回答者数	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	東京	長崎	山口	静岡	福岡	佐賀	富山	島根	茨城
認知度・高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
認知度・低	**6**	**5**	**4**	**3**	**3**	**3**	**2**	**2**	1
全回答者数	6	5	4	3	3	3	2	2	1

	神奈川	岐阜	三重	奈良	徳島	高知	鹿児島
認知度・高	0	0	0	0	0	0	0
認知度・低	1	1	1	1	1	1	1
全回答者数	1	1	1	1	1	1	1

高認知層では、その８割近くを岡山県出身者が占め、複数回答があった県も、宮崎県以外は中四国の県である。またその宮崎出身の３名のうち、２名は現住所を岡山県と回答している。逆に低認知層で回答が複数人数あった県は、岡山近県を含みつつ関東・近畿・九州の広範囲に及んでいる。基本的にウッタテ１を認知すると答えた人は、岡山近県に分布することが改めて確認される。

この結果を踏まえて、先掲の用例(1)について「自分で言うことはありますか？」と問うた回答を、岡山・香川両県での男女別で集計すると次の通りとなった。この用法の使用に性差は関係ないことが明らかである。以下、本稿でウッタテ１について論じる際には性差を観点とすることはない。

表５　岡山・香川両県におけるウッタテ１に対する認知度の性差

	男性			女性		
言うことがある	10	26	**70%**	11	94	**72%**
言わないが意味は分かる	16			83		
言わないし聞いたこともない	10	11	**30%**	37	37	**28%**
わからない	1			0		
合計	37		—	131		—

このウッタテ１は、どのような年代の人々に使用されているのだろうか。先掲の用例(1)について、「言うことがある」「言わないが意味は分かる」と回答したこの用法を認知する人々の年代を集計した。

表６　ウッタテ１を認知する人々の年代別集計

10 代まで	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代	合計
23	39	12	28	28	9	2	1	142
16%	27%	8%	20%	20%	6%	1%	1%	—

結果は**表１**に見た、アンケート全体の回答者の分布とさほど変わらない。60代以上が少ないように見えるのは回答者数の偏りの反映であり、ウッタテ１が新しく発生した用法かどうかはこの調査からは分からない。逆に50代以下の年代において、ウッタテ１における使用に大きな差はない。今のところ、この用法に衰退の兆候は特に見られないということである。

３．１．２．ウッタテ１の用いられ方について

ではウッタテ１が意味するという「最初、手始め」とは具体的にはどのようなものか。先掲の用例(1)「物事はウッタテが肝心じゃ。」以外に、以下の例文についても尋ねた。

(3)「肝心のうったてが悪うて、うもー（うまく）いかんかった」

(4)「うったてがそうなっとるけん、しょうがねえ」

(1)が一般論を述べるのに対して、(3)(4)の如く、「うまくいかない」「しょうがない」などと、事態がネガティブに展開する文脈でも用いられるのか。(1)を認知する人達の中で(3)(4)についてどう回答があったかを集計した。

表７　例文(1)を認知する人達は、他にどういう場合にウッタテ１を使うか

	(1)「物事はうったてが肝心じゃ」			(3)「肝心のうったてが悪うて、うもー（うまく）いかんかった」			(4)「うったてがそうなっとるけん、しょうがねえ」		
言うことがある	**21**	142	**100%**	**9**	116	**82%**	**11**	95	**67%**
言わないが意味は分かる	121			107			84		
言わないし聞いたこともない	0	0	0%	25	26	18%	46	47	33%
わからない	0			1			1		
合計	142	—		142	—		142	—	

(3)は(1)に比して若干認知度が下がるものの、８割以上が認知する言い方である。これに対して(4)は、「言わないし聞いたこともない」という人の割合が目立って多く、認知する人の割合が６割台に落ちこむ。

更に、ウッタテ１が、初めや終わりを持つ進行体であるならば何にでも使えるのか、ということを確認したい。「初め・終わりを持つもの」というだけならば、以下の例文の如く多種多様なものが我々の生活には存在する。例えば(5)(6)ストーリーや(7)歌詞、(8)日常的出来事など、(9)(10)一日や（一）年のような時間的まとまり、(11)(12)のような組織、もしくは(13)個人の競技者人生など。

(5)「川に桃が流れてきょーるのが、『桃太郎』のお話のうったてじゃ。」

(6)「あのドラマはうったてはよかったけど、最後は面白ろねかった。」

(7)「卒業した学校の校歌は、今でもうったてから終わりまで歌える。」

(8)「喧嘩のいきさつを、うったてから話しねえ。」

(9)「一日のうったてに新聞を読まんと落ち着かん。」

(10)「年のうったてに初詣をしよう。」

(11)「卒業生の親睦を図るんが、この会のうったてじゃ。」

(12)「この会社のうったては、兄弟の共同経営じゃった。」

(13)「野球を始めたうったては、オリンピックの中継じゃった。」

これらについては、例文(1)を認知する人達はどう回答したか。結果は以下の通りである。

まず**表７**の(1)(3)と比べて、認知度が総じて低く、(4)のケースに近い。その(4)は「言うことがある」という回答も11名あったが、**表８**の諸例にあってはわずか数名に留まる。つまり(5)～(13)については、確信を以て認知する人々が極めて少ない。

単に「物事の最初、手始め」というだけでは、ウッタテ１を使用するのに何か条件が欠けるのであろう。その条件について考える際に注目されるのが、自由記述で記入された幾つかの回答である。後述するウッタテ２に関連する事項について尋ねた後に、「うったて」やそれに似た響きの言葉があれば記入してください」と尋ねたものに対する回答[注4]である（但し下線は本稿の筆者）。

表８　例文(1)を認知する人達は、他にどういう場合にウッタテ１を使うか

	(5)「川に桃が流れてきょーるのが、『桃太郎』のお話のうったてじゃ。」			(6)「あのドラマはうったてはよかったけど、最後は面白ろねかった。」			(7)「卒業した学校の校歌は、今でもうったてから終わりまで歌える。」		
言うことがある	**3**	99	**70%**	**1**	102	**72%**	**0**	96	**68%**
言わないが意味は分かる	96			101			96		
言わないし聞いたこともない	43	43	30%	39	40	28%	45	46	32%
わからない	0			1			1		
合計	142	—		142	—		142	—	

	(8)「喧嘩のいきさつを、うったてから話しねえ。」			(9)「一日のうったてに新聞を読まんと落ち着かん。」			(10)「年のうったてに初詣をしよう。」		
言うことがある	**2**	100	**70%**	**0**	96	**68%**	**1**	97	**68%**
言わないが意味は分かる	98			96			96		
言わないし聞いたこともない	42	42	30%	45	46	32%	45	45	32%
わからない	0			1			0		
合計	142	—		142	—		142	—	

	(11)「卒業生の親睦を図るんが、この会のうったてじゃ。」			(12)「この会社のうったては、兄弟の共同経営じゃった。」			(13)「野球を始めたうったては、オリンピックの中継じゃった。」		
言うことがある	**1**	67	**47%**	**4**	92	**65%**	**2**	81	**57%**
言わないが意味は分かる	66			88			79		
言わないし聞いたこともない	71	75	53%	48	50	35%	59	61	43%
わからない	4			2			2		
合計	142	—		142	—		142	—	

(14)　計画の最初の行動において、「うったてが肝心だ」

(15)　【職場】で、【会議内で話し合う議題を示す資料を作ること】を指して【うったてを書く】というのを聞いた

(16)　仕事をする時には、うったてをしっかりすることが肝心。

(17)　「うったてをちゃんとせんと、後に響くよ」

(18)　今年は、新体制でのうったての年だから、頑張ろう！

(19)　【刑事ドラマ】などで【うったてから間違っている】

(20)　「この会のうったて（そもそもの始まり）は、○○さんの退職祝いの飲み会の時に決まったものだ。」

(21)　「そもそも」と同じような使い方で、「この件のうったては何ですか？」みたいな使い方をするような・・・。

(22)　（会議などの際に）、「話のうったてとして～」という表現を聞いたことがあります。

(14) が先掲の用例(1)について文脈を記してくれたものと理解できる通り、「計画の最初の行動」にウッタテ１は強くまつわる。会議に関してウッタテを使う場合(15)、資料作成

全般がそう言われるのではなく、「議題を示す資料を作ること」を指すという。議案の草案を練る段階について用いられるということである。

それらが「肝心」である以上、「しっかり」(16)或いは「ちゃんと」(17)行うことが求められるのも自然だが、同時にウッタテ１は、そのように堅実にスタートしなかった場合についての想定も、裏面に含み持つのではないか。それを踏まえての警告が、「後に響く」(17)である。ウッタテから出発して進む方向次第では、事は悪くもなり得る。「頑張ろう！」という声かけ(18)は、この望まぬ事態を招来しないための鼓舞なのであろう。(19)で「刑事ドラマ」が特に指定されるのは、「間違っ」た観点から出発して真犯人にたどり着けない推理を、一度は示してみせる定番の話型ゆえであろう。つまりウッタテ１は、「どのようにも展開し得る始まり全般」を指すのではなくて、「その後の展開に大きく影響するものとしての始発」を意味するもののようなのである。

(14)～(19)がどちらかと言えばその始発の側に立って述べた記述だとすれば、(20)(21)は逆に、事態が既に展開した後の時点に立って述べたものであろう。(20)は恒例となった会の現状からは想像しづらい始発（一度限りのはずの退職祝い）が実はあったのだと述べるものである。それでも一回で終わらずに会を永続させるだけの何かが当初からあって、そうした始発をソモソモと辿っているのであった。この場合にソモソモという「一度見失われそうになった本来の姿を振り返る」語が記されるのは、今立つ地点が、「始発ウッタテ１の延長線上にあるか否か」を確認するという感覚を言語化したものであろう（それを自明として記さないものが(22)）。

ウッタテ１は「その後の計画や事業全体の成果自体を左右しかねない、強い影響力を持つ」という認識も含んで「始発」を表す語であることが、示唆されているように思われる。こういう何らかにインパクトを持った始まりをウッタテ１が意味するのであるとすれば、その呼吸が「肝心だ」と例文に明示されていると回答者は認知度が増し（**表７**の(1)(3)）、逆に「そもそも」などが併記されていないと認知度が下がる（**表８**の(11)など）、というのが今回の調査結果に認知度の違いが現れた背景ではないかと推定される。

３．２．ウッタテ２について

３．２．１．ウッタテ２を用いる人々について

ここからは、ウッタテ２の考察に移る。

先掲の用例(2)のような言い方について、「聞いたことはありますか？」と問うたところ、以下のような結果を得た。

再掲(2)「うったて（は筆を静かにおろしましょう）」(「書の書き方」として)

表９　「書の書き方」として「うったて（は筆を静かにおろしましょう）」などという言い方を聞いたことはありますか。

聞いたことがある	**169**	**189**	**67%**
聞いたことはないが意味は分かる	20		
聞いたことがないし意味も分からない	90	92	33%
わからない	2		
	281		—

認知する層が67％というのは、ウッタテ１の51％よりも相当に高い。更にその内訳も、169人が「聞いたことがある」と回答するが、これは「聞いたことはないが意味は分かる」と答えた20人の８倍以上に上る。ウッタテ１以上に、確信を以て認知される語法がウッタテ２である。

このウッタテ２を認知する189名の出身都道府県を集計すると次の通りである。

表10　ウッタテ２を認知する人の出身都道府県

岡山県	**香川県**	広島県	愛媛県	宮崎県	大阪府	福岡県	兵庫県	熊本県	千葉県
145	**16**	5	3	3	3	2	1	1	1
青森県	埼玉県	新潟県	愛知県	和歌山県	大分県	北海道	長野県	鳥取県	**合計**
1	1	1	1	1	1	1	1	1	**189**

認知する人々の85％を岡山・香川両県出身者が占める。この他に複数の回答があった５県のうち、宮崎県の３名については、うち２名の現住所が岡山県であり、これの影響が考えられるのはウッタテ１の場合と同様であった。

しかし残りの４県については、現住所が岡山県と回答した人は、例えば広島県５名と愛媛県３名の内、それぞれ１名に留まる。宮崎以外の４県については、ウッタテ２の認知度の高さに、岡山県の影響はない可能性がある。

さて、ウッタテ２を最もよく使う岡山・香川の両県において、先掲（2）に対する回答を男女別で集計すると次の通りとなった。この用法の使用にも、性差は関係ないことが明らかである。本稿ではウッタテ２についても、以下性差を観点として論じない。

表11　岡山・香川両県におけるウッタテ２に対する認知度の性差

	男性			女性		
聞いたことがある	10	26	**70%**	11	94	**72%**
聞いたことはないが意味は分かる	16			83		
言わないし聞いたこともない	10	11	**30%**	37	37	**28%**
わからない	1			0		
合計	37		—	131		—

さてこのウッタテ２は、どのような年代の人々に使用されているのだろうか。先掲の用例（2）を認知する層の年代を集計した。

表12　ウッタテ２を認知する人々の年代別集計

10 代まで	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上	合計
36	55	17	37	30	11	2	1	189
19%	29%	9%	20%	16%	6%	1%	1%	—

ウッタテ１と同様に、アンケート全体の回答者の分布とさほど変わらない。ウッタテ２についても、50代以下の年代において使用状況に大きな差はなく、安定的に用いられている用法と言えるだろう。

３．２．２．ウッタテ２の用いられ方について

このウッタテ２については、佐野榮輝（2006）でも指摘のあるように、「書道の授業において」という使用環境が言及されることが多いのだが、これは今回の調査結果にも著しく反映されている。次の二つの問に対する回答は、**表13**の通りであった。

（23）　美術の絵画の授業の際に、筆の用い方に関して「うったて」という用語を使うのを聞いたことがありますか。

（24）　定規を当てて線を引く際に、ペンの用い方に関して「うったて」という用語を使うのを聞いたことがありますか。

表13　筆を用いる、線を引くという場合ならば使えるか

	（23）美術の絵画の授業の際に、筆の用い方に関して「うったて」という用語を使うのを聞いたことがありますか。			（24）定規を当てて線を引く際に、ペンの用い方に関して「うったて」という用語を使うのを聞いたことがありますか。		
聞いたことがある	15	71	38%	9	60	32%
聞いたことはないが意味は分かる	56			51		
言わないし聞いたこともない	**113**	118	**62%**	**122**	129	**68%**
わからない	5			7		
合計		189	–		189	–

いずれの問に対しても、「言わないし聞いたこともない」の回答が最も多く、認知しない層が６割を超える。ウッタテ２については、筆を用いればよい、或いは線を引く動作なら使える、というものではなく、「書道の（授業において）」というところにまで使用の対象が制限されていることが、改めて確認されるのであった。

では、書道の運筆に関してであれば、全般的にどのような場合でも用いられのるかというと、そうでもないようである。先の（2）「うったて（は筆を静かにおろしましょう）」（「書の書き方」として）という言い方を認知する人々について改めて集計して**表14**にまとめた上で、これを次のように「ウッタテが効いている」「ウッタテを効かせろ」と自ら言うことがあるかと尋ねた場合についての集計**表15**と比較してみる。

（25）「この字はちゃんと【うったてが 効いてるね 】」という言い方について、自分で言うことはありますか？

（26）「字を書くときは、ちゃんと【うったてを 効かせねえ】」という言い方について、自分で言うことはありますか？

８割以上が認知する点で、先の**表13**の美術での筆遣い、若しくは単純な線を書く場合のようとは異なる。しかし同時に**表14**（2）と比較すれば、「言わないが意味は分かる」の層が最も多い点にも注目すべきであろう。既に書かれた文字の運筆を評価したり（25）、或いは自らが運筆に関する指示をする場合（26）には、その指示を聞く場合（22）に比べて認知の質が変わる（確信を以て「言う」という層が減る）。これは「（書道の）授業において」という使用環境の制限があるということではないか。

なお、佐野榮輝（2006）に、「ウチツケ」の語についての以下のような指摘がある。

明治四十五年（大正元年・1912 年）、東京高等師範学校附属小学校での国語科「書キ方」に大字を導入した際の児童の感想の一つに、『うちつけも、とめも、はねも、ど

表14　(2)「うったて（は筆を静かにおろしましょう)」と聞いたことがあるか

	(2)「うったて（は筆を静かにおろしましょう)」(「書の書き方」として）という言い方を聞いたことがありますか?		
聞いたことがある	**169**	189	100%
聞いたことはないが意味は分かる	20		
聞いたことがないし意味も分からない	0	0	0%
わからない	0		
合計	189		–

表15　「ウッタテが効いている／効かせろ」と言うか

	(25)「この字はちゃんと【うったてが 効いてるね 】」という言い方について、自分で言うことはありますか?			(26)「字を書くときは、ちゃんと【うったてを 効かせねえ】」という言い方について、自分で言うことはありますか?		
言うことがある	65	164	**87%**	45	156	**83%**
言わないが意味は分かる	**99**			**111**		
言わないし聞いたこともない	24	25	13%	32	33	17%
わからない	1			1		
合計	189		–	189		–

れも、はっきり書ける』（水戸部寅松・本田小一共著『小学校教授用　書法及書方教授法』大正二年発行。第五章「書方教授の教材」第六節「練習せしむべき文字の大きさ」より）という一文を載せる。「うちつけ」は、最初・発端の意味として始筆を指すと考えてよいだろう。

この「ウチツケ」は定着したのであろうか。以下のように聞いてみた。

(27)「書の書き方」として「うちつけ（は筆を静かにおろしましょう)」などという言い方を聞いたことはありますか。

表16　「書の書き方」として「うちつけ」などという言い方を聞いたことはありますか。

	全体			ウッタテ２を許容する人々		
聞いたことがある	12	53	19%	10	50	26%
聞いたことはないが意味は分かる	41			40		
言わないし聞いたこともない	**222**	228	**81%**	**135**	139	**74%**
わからない	6			4		
合計	281		—	189		—

全体でも、ウッタテ２を認知する人々の間でも、「言わないし聞いたこともない」が圧倒的に多い。今回調査した範囲では、ウチツケが定着した形跡はないというべきであろう。

４．ウッタテ１・２を派生したもの

４．１．ウッタテ１・２と共通語形式「ウチタテル」について

前節まで見てきたとおり、岡山近県のウッタテ１・２は、いずれも相当に限定された用法として使用されているのであるが、ではこれらはどのようにして今日の姿に至ったのだろうか。ウッタテが派生したプロセスとして、語形から直ちに想定されるのは動詞ウチタテルの連用形が名詞に転成したというものであろう。

しかしその跡付けは決して容易ではない。というのは以下に述べるように、ウッタテを認知する人々にとって、既にウチタテルという共通語形式が方言ウッタテと別物となっていると考えられるのである。共通語ウチタテルの用例としては、次のようなものが考えられるだろう。

(28)　太郎は水泳で、インターハイの新記録を打ち立てた。

これについて、「あなたの方言では、「…新記録をうったてた」のようにいいますか。」と尋ねたものを、ウッタテ１・２それぞれを認知する人別に集計した。

表17　あなたの方言では、「…新記録をうったてた」のようにいいますか。

	ウッタテ１を許容する人			ウッタテ２を許容する人		
言うことがある	12	56	39%	12	66	35%
言わないが意味は分かる	44			54		
言わないし聞いたこともない	**82**	86	**61%**	**119**	123	**65%**
わからない	4			4		
合計	142		—	189		—

いずれも「言わないし聞いたこともない」が最も多く、認知度がかなり低い。

更に自由記述式で、次のように問うたものの回答にも注目される。

(29)　「「新記録を打ち立てた」を、あなたの方言で言い直すと、どうなるか、記入欄に書いてください。「打ち立てた」としか言いようがないという場合は、「同じ」と記入して下さい。」

これへの回答としては、「同じ」というものの他、

(30)　新記録を打ち立てんといけん

(31)　新記録をうったてんといけん

(32)　新記録をこさえんとおえん[注5]

のように種種のものがあったが、「同じ」という回答と（30）の類いは「ウチタテル」をそのまま記入したもの（ウチタテル系）、(31)がウッタテルという方言形を用いたもの（ウッタテル系）、（32）がウチタテル／ウッタテルとは別の語彙によって表現したものというように、結局は３パターンに分類することができる。その結果を集計したものが**表18**である。

ウッタテル系を用いた回答は最も少なく、８割がウチタテル系である。

更に、その優勢なウチタテル系の具体例は先掲（30）の「打ち立てんといけん」の形が最も多かったが、それ以外にも次のようなものが見られる。

(33)　新記録を打ち立てねーといけんのよ

(34)　新記録を打ち立てにゃあ、いけん

(30）も含めて圏点を記した部分のように、これらの回答は「方言形に言い直すと」とい

表18 「…新記録をうちたてた」をあなたの方言で言い直すとどうなりますか。

		ウッタテ１を許容する人			ウッタテ２を許容する人		
ウチタテル系	同　　じ	55	**113**	**80%**	147	**150**	**79%**
	「打ち立てる」	58			3		
別語彙	「こさえる」「出す」等	15	15	11%	25	25	13%
ウッタテル系	「うったてる」	14	14	10%	14	14	7%
合　　計		142	142	―	189	189	―

う条件に従って記述していることが明らかなのであるが、そうであっても「記録を打ち立てる」の部分はウッタテルではなく、ウチタテルのままを記すのである。方言を記す際でもウチタテルとウッタテは区別される。例えば「太郎 {バカリ／バア} 誉められる」のように、共通語的に言おうとするときはバカリを、方言的に言うときはバアをという具合に、バカリ／バアを交換可能に用いているのとは、状況が異なるのである。

これは、他の地域でも同様に見られる現象のように思われる。『日本方言大辞典』には「うったつ【打立】」の項に「用意する。身支度する。盛装する。」の語義と、熊本県の「立派にうったってきた」の用例を掲げる。また藤原与一（1996）も「ウッタツ」の項で次のように記述する。

（35） 熊本県下などでは、これが「ひどく着飾る」の意で用いられている。「イサギーウッタッテ（ひどく着飾って） ドケー 行カストカイ（何処へお行きかい）」などとある。 阿蘇山南嶺：エーライ キョーア ウッタトル ナー。（えらいきょうは“おしゃれしとる”ねえ。）[注6]

今回の調査でも、次の質問に対して、57名の人が「着飾って、おしゃれして」を選択した。

（36）「今日はえらくうったっているなあ」の【うったって】は、どういう意味を表しますか。【複数回答可】」

但しこの57名の大半は、次の問には、「もっと着飾らんと」「もっとおしゃれせんね」と、ウッタツ以外の語で表現する。

（37）「もっとおしゃれをしなさい」「たまにしかおしゃれをしない」をあなたの方言での言い方に、直して書いてみてください。

つまり大半の回答者は、ウッタツが「着飾る」の意味であると知っているか、もしくはそう類推はできるが、自らの使用語彙としては意識していない。その中で、熊本県出身の或る回答者は、（37）に次のように回答した。

（38） 今日はえらーいうったってから／ぴしゃっとうったたんば

この回答者にあっては、ウッタツ（着飾る）が、自分の方言形として確実に保持されているものと考えられるのだが、この回答者の（29）への回答はやはり「同じ」、すなわち「新記録を打ち立てないといけない」なのである。方言形ウッタツを維持する話者が、それとは別の語として共通語ウチタテルを用いている一例である。

4.2. ウッタテの通時論的考察について

以上の如く、現代岡山にあって既にウッタテ１・２とウチタテルが分化している以上、両者は過去のどこかの地点において生じたと考え、ウッタテの派生の経過の解明について

は通時的考察に委ねるべきことになるが、これもまた容易ではない。『時代別国語大辞典室町時代編』は「うつたつ」【打立つ】の項で次の『玉塵抄』の例(39)を引き[注7]、傍線①のウッタテについては（40)、②（41）のように記述した。

(39)　起(タテ)レ筆絶(ヲタツ)レ筆ト云ㄱアリ　①ウツタテナニㄱヲシルサウト思テフデヲソメテ②ウツタテラルゝト　又二百四十二年ノアイダノㄱヲシルシヲワツテ筆ヲトリヲカレタヲ　絶ト云タゾ

(40)　自動四❹　「うつたつて」の言い方で連用修飾語に用いられ、ある意図を持ち計画を立てて、事に着手するさまを表す。

(41)　他動下二❷　ある事をし始める。

つまり、『玉塵抄』成立の1563年までに、②（文章の執筆を）開始するという下二段の動詞用法と、①「初め（に)」の意味の名詞乃至副詞的用法が既に出現していたということである。

また、『日葡辞書』には次の記述が載る。

(42)　Vttachi, tçu, atta.　例えば戦争などへ出発する

ではこれらと同様の用例が、別の資料で見出せるかというと、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』で検索しても、「ウチタテル」の例としては今のところ次のような例しか確認できない。

(43)　打杭うち立てはべりし所に立てはべりし。(落窪物語・巻之二)

(44)　鉄の釘三十七を其の身に打立たり。(今昔物語集・巻第二十・第十六)

圏点部のように尖ってそれだけでは自立しないものを、垂直になるように突き入れること、「突き立てる」とでも訳すような動きであり、物理的動作でもあって、(39)②とは懸隔のある用例である。

ところで(43)(44)のようなウッタツ（下二）と類似する例が、タツ（下二)、ツキタツにも見られる。

(45)　早く、片角に築垣を築廻して、脇戸をもて其の内に、深さ三丈許、井の様なる穴を堀て、底に竹の鋭杭を隙無く立てて、年来此のごとく上り下る人を謀り入れて…（今昔物語集・巻第十六・第二十）

(46)　鷹取の思はく、「我れ蛇の為に呑れむよりは、海に落入て死なむ」と思て、刀を抜て、蛇の我に懸る頭に突き立つ。(今昔物語集・巻第十六・第六)

タツが本来持っていた用法(45)を、ウツ(43、44)・ツク(46)とそれぞれに複合して分化させたということであろう。

(47)　杭等をタツ(45)　→　杭・釘をウチ・タツ(43、44)、刀をツキ・タツ(46)

(39)のウッタツも同様の過程によって成立したのならば、タツの側にも「始める」を意味する用例が見出されることが期待されるのだが、そのような例は未だ見出し得ていない。

(48)　*コトをタツ(？)　→　執筆をウチ・タツ(39②)

通時的考察は、今後(39)を派生させたタツの側の用例の発見を待たねばならないと思われるのである。

5．まとめ

本稿で明らかになったことは次の通りである。

1．ウッタテ１・２はともに岡山県近県で使用されていることが改めて確認された。使用する年代も幅広い。
2．ウッタテ１は、単に「最初、手始め」を表すのではなく、「その後の展開を左右しかねない影響を持つ始発」というところまで、語義が制限されている可能性がある。
3．ウッタテ２は、「書道の授業において」言及される「運筆の初め」というところまで、使用環境が制限されている可能性がある。
4．現代語では、方言形式ウッタテと共通語形式ウチタテルは既に分裂していて、互いに交換可能に用いられていない。

今回、281名もの協力者を得て、現代語ウッタテの輪郭の幾ばくかを記述できたようには思う。しかしこれ以上に記述を限定するには、もはやアンケートによる一斉調査では限界があるように思われる。ウッタテを認知する人々に、この語が用いられる環境や文脈等について直接尋ねる対面調査によって、語義の詳細を明らかにする機会を今後持ちたい。

通時的考察についても、動詞タツ（下二、四段）の展開と、そこからの複合動詞の派生について考察する必要があるが、その際には、(39)が抄物に見出されることからも、中近世の口頭語的用法を収める資料の調査が欠かせない。

かくして現代語の使用状況と通時的資料の調査の両面において、この語について考究するための課題が残った。予備的考察と題する所以である。

注

1）佐野榮輝氏（本学名誉教授）から、この用例の「静かに」という部分が、実際の運筆の様態にそぐわない旨の指摘を受けた。以下の論旨には影響はないと判断するものの、今後の調査の際にはより適切な設問を心がけたい。ウッタテ２が岡山県下特有の方言形式であることを早くに指摘されて以来の学恩と併せて、ご教示に深謝するものである。
2）以下、表内の数字は、特に単位を記さない場合、人数を表す。
3）以下もこのように、「言うことがある」「言わないが意味はわかる」と回答した層と、「言わないし聞いたこともない」「わからない」とをそれぞれまとめ、前者を「認知度の高い層」、「後者を認知度の低い層」と見なす。
4）アンケート調査での実際の設問は次の通り。
「書道以外の分野で、「うったて」やそれに似た響きの言葉を使うことがあったら、例のように書いてください。（例、【野球】の分野で、【バッティングの最初のモーション】を指して、【大谷翔平のうったてを真似て打席に立つ】などという。）」
5）「…んとおえん」は、「…しないといけない」といった意味を表す岡山方言の言い方。
6）アクセントを表示する傍線は省いた。
7）中田祝夫（1971）によって確認した本文に、傍線と便宜濁点を施した。

参考文献

佐藤亮一（2009）『都道府県別全国方言辞典』「岡山県」の項（三省堂）
佐野榮輝（2006）「ウッタテ考」ノートルダム清心女子大学日本語日本文学科ブログ・日

文エッセイ27
https://www.ndsu.ac.jp/blog/article/index.php?c=blog_view&pk=157379874608e0becd6aa0a465e3d43c345eb3fb65&category=&category2=
中田祝夫（1971）『玉塵抄』（6）（抄物体系別巻、勉誠社）
藤原与一（1996）『日本方言辞書―昭和・平成の生活語―』（東京堂出版）
国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（バージョン2021.3，中納言バージョン2.5.2）
https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2021年９月１日確認）
『日葡辞書』（土井忠雄、森田武、長南実編訳、岩波書店、1980）
『日本方言大辞典』（小学館、1989）